ようこそ校長室へ！
Ｎｏ．117
令和７年３月１９日
発行 ： 貝 塚 敦
に にこにこ笑顔で い いつもみんなで つ 紡ぎ繋げる心で に 日本一をめざすのだ

それは私の仕事ではありません？

前々号（No.115）に続いて、先生方の働き方について。

＜エピソード３＞

この校長だより第８２号から第８８号でも紹介した通り、かつて４年間、私は在外教育施設教員として文部科学省からニューヨークに派遣されていましたが、その赴任して間もない時の話です。

私が教頭として勤務していたニューヨーク補習授業校は、土曜日のみ、現地のアメリカの中学校の校舎を借用して授業を行います。

毎週土曜日、私は立場上、学校に一番に行って学校開きの準備を始めます。少し遅れて教務の先生（現地採用の永住の日本人で、授業をすることはなく教頭の補佐や校務全体の統括）が学校にきます。現地校のカストディアン（日本で言えば用務員さんのような立場の人）を補習校の授業日である土曜日にも雇っていましたので、学校の開閉錠や施設の管理・修繕等はそのカストディアンがしてくれていました。

私が学校に行ってまずすることは、様々なサイン関係のボードをあちこちに掛けながら誰もいない校内を巡視し、始業の準備をすることでした。これは、日本の学校でも同様で、だいたいは教頭先生が学校に早目に来て校内を一通り見回り、校内に異常がないかを確認したり、必要な場所の開錠や窓を開けたりするのが通例です。しかし、もちろん教頭先生の勤務時間が特別長く設定されているわけではありませんので、本来ならそのために教頭先生が特に早く来る必要はないのです。

さて、赴任して間もないある授業日、いつものように校内巡視をしていて、廊下にゴミが落ちていたのでそれを拾ったら、それを見ていた教務の先生に注意されました。

「教頭先生、先生がそんなことをする必要はありません。教頭先生の仕事ではありません。それはカストディアンの仕事です。先生が落ちていたゴミを拾うことはカストディアンの仕事を奪うことになります」

ゴミを拾って注意されたのは生まれて初めてでした。ささやかなカルチャーショックでした。郷に入れば郷に従うと考えて、それ以降は教務の先生の指示通りにしようかなとも思いましたが、そこにゴミが落ちているのに拾わないわけにはいきませんでした。教務の先生が見てなければ、やっぱりゴミを拾いました。

＜エピソード４＞

学校によっては、教頭先生よりも早く学校に来る先生がいる学校は少なくありません。そして、そういった先生が、先生方が飲むコーヒーやお茶用のポットのお湯を自主的に沸かしたり電気ポットをセットすることも、当たり前の学校アルアルの一つです。当校でもそうです。

若い時分に勤務した学校もそうでした。50 歳くらいの体育の先生が学校に一番に来て、電気ポットのセットをしたり、教務室のシンク周りを綺麗に拭いたりしたりするのがその先生のルーティンでした。別に誰に頼まれたり、誰かに指示されて役割として与えられたわけでもなく。

ある日その先生がお休みの時があって、電気ポットのお湯が沸いていない時がありました。すると、出勤時間ギリギリに来てコーヒーを飲もうとしたある女の先生が、「どうしてお湯が沸いてないの。困るじゃないの」といきなり大声でブチキレたのです。あきれました。もちろん、勤務時間中、ポットが空になれば、その時気づいた誰かが水を補充するわけですが、その先生がそんなことをする姿も一度も見たことはありません。

子どもの目の前で若い先生を面罵することもあるなど、こんな人は教師であるべきではない、と自分はその先輩である先生のことを心の中でよく思っていませんでした。それから約 20 年後にまた同じ学校で一緒に勤務することがありましたが、彼女はほぼあの時のままでした。

人間の性分や特性は簡単には変わらないし、学校というところは、そんな人間に個人レベルで躊躇なく直言したり諫めたりできる雰囲気や組織的なシステムを備えた場所ではないのだと、つくづく痛感したものです。

＜エピソード５＞

ある会合で、市内の小学校のある校長先生が愚痴っていた話です。

「雪が降ると、いつもより家をかなり早目に出て、学校に早く出

勤してくる先生が何人かいます。そういった先生方は、このくらいの雪ならこのくらいの時間に出た方がいいな、と経験値でわかっているんでしょうね。余裕をもって出勤し、そういう人が中心となって、誰が指示したわけでもなく誰からともなく、生徒玄関や職員駐車場の雪かきに取り組んでくれます。ありがたいことです。
　いつも、雪かきが全部終わってきれいになった駐車場の、一番職員玄関に近い場所に車を駐車する初任者の先生にその話をしたら、『雪かきは私たち教員の職務なんですか？』と言われました。別に『あなたも早く来るべきだ』なんて嫌みのつもりで言ったわけでもないですし、そんなこと言えば完全なるパワハラ・モロハラの類でしょう。でも、あの言い草はないと思うんですけど」と。

　ここまで話をしてきて決して誤解してほしくないことがあります。
　学校に早く来る先生が立派で、遅く来る先生がダメなどと思っているわけでは決してありません。個人個人が抱えている事情や環境はそれぞれです。ギリギリに来ようが、勤務時間内に出勤していれば何ら問題ない、誰にも非難されることのない適正な勤務態度です。
　廊下に落ちているゴミを拾うことも、朝早く来た人が電気ポットの準備をするのも、気が付いた人が水の補充をするのも、雪の日に朝早く出勤したから雪かきをするのも、そんな必要はどこにもないのです。それはすべて、校務分掌として正規に与えられた業務ではなく、個人の好意や善意として行われているだけです。そういう好意や善意に助けられなくても頼らなくとも、学校がきちんと回るようにマネジメントするのが管理職の責務だと思いますので、結果的にそういった好意や善意に甘えて学校が回っていることに、私自身も管理職としての至らなさを痛感し、先生方にはたいへん申し訳なく思っています。
　一方で、学校の校務分掌で正規に割り当てられている仕事でなくても、好意でみんなのために頑張っている先生は、だれかに感謝されたり評価してほしいからやっているわけではないはずです。私も「それはあなたが勝手にやっていることでしょ」などと思う気持ちも毛頭ありません。とてもありがたく感じています。でも、「先生、そこまでやってもらわなくてもいいんですよ」と言える覚悟もありません。

　さて、学校では「校務分掌」という名のもとに、構成人員を有機的に配置し、個々の役割分担と責任を明確にしながら組織づくりを

し、教育活動を効果的、合理的、能率的に運営することが求められています。それが管理職としての責務である組織マネジメントの一つです。
　ですが、現実的に、みんながみんな「これは私の仕事ではありません」「これはあなたの担当です」というふうにドライに割り切ってしまうと、それはそれで組織はうまく動かないものだと思います。学校の先生が、どんなに給料が高くて福利厚生が充実して待遇がいい職業となったとしても、人間関係がある意味殺伐とした職場になれば、そこで働くことを希望する人間は、益々少なくなっていくのではないでしょうか？
　学校現場や教育委員会やそして私自身も好んで使う言葉として「連携」と「協働」があります。「これは私の仕事」「これはあなたの分担」として互いに切磋琢磨しながら熱心に頑張るのも「連携」と「協働」の一つの形かもしれません。でも、本当の「連携」と「協働」とは、深い信頼関係に基づいて、互いの業務領域のすきまや穴を互いに埋めあうこと、互いの業務で重なった部分に無駄や非効率が出ないようにすること、そのために必要な適切なコミュニケ―ションをとって行動することだと思っています。もちろんそれをうまくマネジメントするのが管理職としての力量であることは重々承知しています。

　私も若い頃から学校に来るのがとても早い人間です。決して学校が好きなわけではありません。基本的に車の運転が好きではないので、車の渋滞に巻き込まれたり、他の車に必要以上に気を遣ったり、何度も赤信号で止まったりするのが嫌で、車がすいている時間を選んでいるだけなのです。
　それに加えて、年々加齢による早起きが習慣となってきました。あと 10 年間も待たずとも、車にもみじマーク（四葉マーク）をつけたいくらいですが、安全運転に気を付けて雨にも負けず風にも負けず雪や夏の暑さにも負けず頑張って通勤しています。
　でも、時々雪が積もったりすごく疲れが溜まっていると、帰宅するのも面倒で、学校で一晩過ごしたいと思うこともあります。どうせなら、学校に毎日寝泊まりすれば、運転しなくて済むし通勤時間もいらないし、警備保障のコストも大幅に削減できるはずだと想像することもあります。
　でも、そんなことしたら当校の警備保障会社のアルソックの担当者に叱られそうです。「それはあなたの仕事ではないでしょ！」と。